

## 二棟造について

## 一 日本民家の源流を探る 一

鹿児島大学教授 伊藤 行

## 1. まえがき

二棟造という形式は、太平洋沿岸地域の四国・東海・房総や八丈島などに似た形のものが見られるが、同じものではなく、かなりの差異がある。それらは、高床式の棟と土間ニワの棟とを屋根の軒を接続させて一家屋を構成する。鹿児島県の場合は、二つの棟は高床式で、床をつなぐときには必ず段差を設けて接続するといふところが異なっている。二棟造は、原則として、主屋と炊事棟を別棟とする形式なのである。炊事棟は普通15センチ前後低くなり、その一部に土間ニワを持っている。

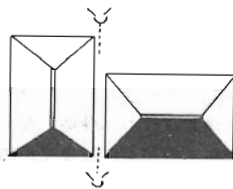
主屋と炊事棟を別棟とする形式は、東南アジアから太平洋地域にかけて広範囲に分布しており、二棟造はその分布の一面を占めるものと考えられる。もともと日本上代の住居は高床のものがあり、南方系の性格を示している。それが日本に入ってきたのは、本来南方の産物である米が作られるようになった弥生時代のころであろう。

二棟造は薩南諸島を含め鹿児島県全域に分布し、宮崎県南部にも存在する。旧薩摩藩の領内に分布しているといふ方がよく、二棟造の北限の境界線は旧薩摩藩の北側境界線とほぼ一致する。本土の二棟造は軒をつなげているが、薩南諸島や甌島の二棟造はそれぞれ独立し、分離している例が多い。沖縄県でも同様である。鹿児島県、沖縄県は、二棟造のいわば本場なのである。

## 2. 二棟造の概観

二棟造を屋根伏で見ると図-1のような形が最も多く、当地方でいわれる「オモテ」と「ナカエ」からなり、二つの棟を一家屋

として使う形式の民家である。はれ（「公開の」「儀礼的」の意）とけ（「日常の」「私的な」の意）という



言葉を使うなら接

図-1. 一般型二棟造の屋根伏図

密的要素の強い「オモテ」がはれに相当し、居間、茶の間、台所、作業場の要素の強い「ナカエ」がけに相当する。「オモテ」と「ナカエ」との間には必ず15センチ前後の段差がつけられており、オモテが上段となっていることはさきに述べた。なかには、インキョウ、ウマヤなどがくっついて並んでいるものも見られ、機関車という三重連、四重連をほうふつとさせる姿は見事なものである。

分棟、別棟、二つ家などの呼び方もあるが、「オモテ」と「ナカエ」の二つの棟が内部で通じ合い、一つの主屋を構成するので二棟もしくは二棟造という呼び名ができた。すなわちウマヤ、インキョウなどが連結して三棟あるいは四棟並ぼうと、主屋は「オモテ」と「ナカエ」の二つの棟で一つの主屋を形成し、他は付属屋とみなすのである。だから「オモテ」と「ナカエ」のどちらか一方でもなくなれば、ほかにウマヤなどが付き、外見的に二棟に見えても、二棟とは呼ばないのである。一方、本土以外の島には「オモテ」と「ナカエ」が全く分離し、いったん戸外に出て行き来するものがあり、それは二棟造へ発展するそもそもの原初的なあり方を示すものである。これは文字どおり二棟であって、離れ二棟造と呼ぶことにしよう。

オモテ、ナカエという言葉には二棟のそれぞれの建物を指す場合とその中の一室を指す場合とがある。以下、家屋を指す場合には「オモテ」「ナカエ」とし、部屋を指す場合にはオモテ、ナカエとして区別していきたい。

ここで、ナカエという呼び名がどこからきたものかを考えてみたい。ナカエは中世の上流の邸宅の一室の呼び名であるナカイから転じたものであると思う。すなわち中居は鎌倉、室町時代の公卿、門跡、院家、寺家、武家の住宅における奥向きの一室で、勤仕の女である中居衆の控室であった。そこでは主に、炊事、調理、配膳がなされた。今日料理屋という仲居という女性の呼称もここからでている。ナカエを当地方ではオスエともいうが、御末が同じく鎌倉、室町時代の内裏、公卿、門跡、将軍家、寺家などの住宅における奥向きの一室で、炊事などの雑役をする女中の控室であり、配膳室でもある。機能的には中居と同じであるが、呼

称上の格式は御末の方が上である。

鹿児島県西岸に近接している甌島の手打では今でもナカエをナカイといっており、中世の呼称をそのまま伝えていたと考えられること、ならびに時代を同じくし、機能のうえからも同じであるオスエの呼称が当地方に存在することなどから、ナカエはナカイの転訛した呼称であると考えられる。知覧町の年寄りから聞いた話によると、お嫁にきたとき、料理のやりかたを教わったが、このやりかたは鎌倉時代から伝わるものであると聞かされたという。鹿児島県の生活、文化の中には鎌倉時代ごろまでさかのぼるとされる古い風俗習慣がいくつか残っている。

「オモテ」と「ナカエ」の結びつきにはさまざまな形があり、次の5つに分類することができる。

- (1) 離れ二棟造 「オモテ」と「ナカエ」がそれぞれ独立し、離れているもの。
- (2) 廊下連結型 「オモテ」と「ナカエ」と廊下で連結し、日常の生活に不便のないようにしたもの。
- (3) テノマ接着型 「オモテ」と「ナカエ」の屋根が接着したところに樋がかかり、その樋の下は板の間でテノマと呼ばれ、「オモテ」と「ナカエ」をつないでいる。
- (4) 部屋接着型 「オモテ」と「ナカエ」の屋根が樋で接着するが、その下を板敷にせず畳を敷き「ナカエ」と「オモテ」の部屋が接着するもの。
- (5) 小屋組連結型 「オモテ」と「ナカエ」の軸組、小屋組の一体化。屋根はもとの形をかなり残しながら一つになっている。

系統的には(1)→(2)→(3)→(4)→(5)の順をたどって発展したものと考えられる。

離れ二棟造のナカエのように、別棟にして家屋をたてる形式は、東南アジアから太平洋地域、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアにかけて広範囲に分布していることはさきにも触れたが、暖暑の地では炊事の際、火を使うことによって熱気を室内に導かぬようにする配慮があって、炊事棟を別棟にしたものであろう。

甌島の手打では、離れ二棟造の「ナカイ」(手打では「ナカエ」をこのようにいう)に土間だけのものがあったことが報告されており(小野重朗「南九州民家図帖」)古くは「ナカイ」には土間だけで板敷きの間はなかったという話も私自身古老から直接聞いた。このことは鹿児島県を除く他県の二棟造が高床式の棟と土間二ワの棟とを連続させている例を思い出させ、土間だけの炊事棟が原初的なものであることを推測させるのである。

群馬県茶臼山古墳から家型埴輪が出土しているが、主屋1、副屋2、倉3、厨らしきもの1、付属屋1、と8つを数える。また唐招提寺文書によれば、平城京

左京七条一坊にあった官吏の家には検皮葺き板敷屋1、板屋4、板倉3、草葺き厨屋1の建物があったことが知られる。すなわち少なくとも5世紀ごろから8世紀にかけて余裕のある階級は同じような規模の住宅や倉など数多く建てることによって全体の面積を広くした。ここで注目すべきは、唐招提寺文書に草葺き厨屋が見られることで、多棟の家屋構成であることとあわせて、海を越えた南方地域の性格をうつしだしている趣があることである。

この点で宮崎県西部原出土の子持家型埴輪は日本の住宅史の流れになじまない異様なものである。古墳時代の建築技術がまだ十分に進んでいなかった状態において、またわが国の安易につく民族性から推して、規模の大きな、形の新しいものを造ることはさけて、その当時ふだん使っているものを数多く造り足して要求を満たしたものである。またその方が台風や地震に対して具合がよかった。このような考えをおし進めれば、子持家型埴輪のような家はわが国には存在しなかったとする方が妥当であろう。形をきめるには、中に含まれる埴輪の破片が極めて少なく、想像によって補われた石膏部分が多すぎるので、あえて疑問をさしはさんでおきたい。中央の屋根と副屋の屋根とは土質、焼き具合が異なっていることも付け加えておこう。

文化の中心部にある地域は変化のテンポが速く、新しいものが入ってくると古いものはたちまちのうちに忘れさられてしまうが、中央から離れた僻地では古いものを温存する傾向がある。「おじゃる」という言葉は東北地方と八丈島と鹿児島に残っている。狂言などに「おじゃる」という言葉が使われていることから、かつては全国に行われたものが周辺の地域に残存していると解釈しなければ、この一見奇妙な現象は説明がつかないであろう。甌島の鹿児島村および下甌村の各集落には秋田県の「なまはげ」と同じように鬼面をかぶって人宅を訪れる風習が残っている。「としどん」といわれているが、これも同じように解釈したい。与論島には奈良時代の発音である花を「バナ」といい、箸を「バシ」という発声用法が残っている。そのようないくつかの事例から推して、多棟の家屋構成は古代日本において富裕な人々には一般的なものであり、離れ二棟造は日本全土に庶民の間に行われたものであろう。このことは初めに触れたように太平洋岸の高知県、静岡県、千葉県、宮城県、熊本県などに二棟造が残っていることからかなり根拠のある推測となるであろう。そして恐らく近世に入ってから、離れ二棟造が、軒端を接着させる二棟造となったものであろう。いまでは離れ二棟造が鹿児島県の甌島と沖縄県にのみ残っていると解した方がよいであろう。それは社会的原始性と停滞性において通ずるものがあるためであろう。

か。

寛永10年(1633)の「肥後藩人畜家敷改帳」によれば、江戸初期の熊本地方の百姓の住まいは小面積(10坪~6坪)の「本家」にそれと同じくらいか、すこし小さめの「かまや」を持ち、それに「おや家」や「名子家」が付き「稲くら」「馬や」などが加わって多棟の家屋構成であったことがわかる。百姓の代表的な例を挙げれば、家族は6人、屋敷は8畝12歩、家数は5棟である。その規模は本家2間×4間、かまや2間×3間、おやの家2間×3間、馬や9尺×3間、稲くら9尺×3間となっている。つまりききに触れた奈良時代の官吏の住まいとほとんど変わらない住居形式の生活が営まれていたのである。

### 3. 二棟造りの成因

居住部分の主屋と炊事棟が別棟となった離れ二棟造は日本全体から見れば、奄美諸島や沖縄の離島や八重山群島などに最も分布が顕著である。しかし杉本尚次氏の調査(「日本民家の研究」)によれば、主屋と炊事棟が合体する傾向は八重山群島でも戦後著しくなり、新しい住宅はほとんど主屋と炊事棟を合一させた形式をとっている(瓦葺きの場合)という。そのような二棟の合体化は薩摩藩本土においては、ずっと早く、おそらく江戸時代中期以降二棟造に進展していったが、これは肥後藩において別棟型の住居が接合して鉤屋形式になってゆく経過とはほぼ時を同じくしていると考えられる。

現在の日本では日進月歩という言葉のとおり、目まぐるしく生活の形式が変化し、科学技術の生みだすもろもろの道具設備の類は進歩発展してやまない。しかし目を世界に転じてみると、時間が止まっているかにみえるような地域もある。ニューギニアやアフリカのある地方では5千年前の彼らの祖先の生活とあまり変わらない生活をしているようにみえる。後進地といわれる地球上の陸地のかかなりの部分が、特に社会の下層では、氷河の動きに似て実に緩慢な、目には見えにくい程度の変化しかとげていないように思われる。

日本でも8世紀奈良時代の民衆の生活と、17世紀江戸時代初めの民衆の生活とはあまり大した向上の差はなかったといっても過言ではあるまい。それは唐招提寺文書と肥後藩人畜家敷改帳に見られる多棟家屋形式にそのしるしを求めることができる。

江戸時代に入ってから手工業その他もろもろの産業の生産力はかなりの上昇カーブを描いて増大していった。参勤交代などの制度からうかがえるように、全国にわたる情報の疏通化の増進とあいまって江戸時代の国民総生産は次第に大きくなっていった。食事が朝夕の2食から1日3食となったのも江戸時代からである。このように民衆の生活レベルの向上があり、生活にある程度ゆとりがでてきたことや合理的思考の発達为背景となって離れ二棟造が接合して二棟造となり、鉤屋となり、また二棟を直列につなぎ、一つの屋根をかぶせた直屋となっていったものであろう。これは最近八重山群島に行われつつある現象でもある。